

## 親鸞における二種回向と菩薩道の課題

—『末燈鈔』第八通を機として—

廣 瀬 惺

### 一 親鸞と菩薩道

親鸞は『末燈鈔』第八通に、次のように記している。

また五説といふは、よろづの経をとかれ候に、五種にはすぎず候なり。一には仏説、二には聖弟子の説、三には天仙の説、四には鬼神の説、五には変化の説といへり。このいつつのなかに、仏説をもちいかみの四種をたのむべからず候。この三部経は釈迦如来の自説にてましますとすべしとなり。四土といふは、一には法身の土、二には報身の土、三には応身の土、四には化土なり。いまこの安樂浄土は報土なり。三身といふは、一には法身、二には

報身、三には応身なり。いまこの弥陀如来は報身如来なり。三宝といふは、一には仏宝、二には法宝、三には僧宝なり。いまこの浄土宗は仏宝なり。四乗といふは、一には仏乘、二には菩薩乘、三には縁覚乘、四には声聞乘なり。いまこの浄土宗は菩薩乘なり。二教といふは、一には頓教、二には漸教なり。いまこの教は頓教なり。二藏といふは、一には菩薩藏、二には声聞藏なり。いまこの教は菩薩藏なり。二道といふは、一には難行道、二には易行道なり。いまこの浄土宗は易行道なり。二行といふは一には正行、二には雜行なり。いまこの浄土宗は正行を本とするなり。二超といふは、一には堅超、二には横超なり。いまこの浄土宗は横超なり。堅超は聖道自力なり。二縁といふは、一には無縁、二には有縁なり。いまこの浄土は有縁の教なり。二住といふは、一には止住、二には不住なり。いまこの浄土教は法滅百歳まで住したまひて、有情を利益したまふとなり。不住は聖道諸善なり、諸善はみな龍宮へかくれいらたまひぬるなり。思不思議といふは、思不思議の法は聖道八万四千の諸善なり。不思議といふは、浄土の教は不可思議の教法なり。これらはかやうにするしまふしたり。よくしれらんひとにたずねまふしたまふべし。またくはしくはこのふみにてまふすべくも候はず。目もみえず候う。なにごとみみなわすれて候うへに、ひとなどにあきらかにまふすべき身にもあらず候。よくよく浄土の学生にとひまふしたまふべし。あなかしこ、あなかしこ。

閏三月二日

親鸞

〔定本親鸞聖人全集〕三書簡篇八〇頁

これは、親鸞八十五歳の時に記したものである。親鸞は八十四歳の時に法然の言行録である『西方指南抄』を写しているが、その『西方指南抄』の中に、「浄土宗の大意」として法然が、浄土宗がいかなる仏教であるのかを示している一段がある。この『末燈鈔』の文は、その釈であるといえる。

『西方指南抄』には、

五説の中には仏説也、四土の中には報土也、三身の中には二身也、三宝の中には仏法也、四乗の中には仏乗なり、二教の中には頓教也、二蔵の中には菩薩蔵也、二行の中には正行なり、二超の中には横超也。二縁の中には有縁の行なり、二住の中には止住也、思不思議の中には不思議なり。またいはく、聖道門の修行は、智慧をきわめて生死をはなれ、浄土門の修行は、愚痴にかへりて、極楽にむまると云々。

〔定本親鸞聖人全集〕五・二八九頁〕

とある。

ところが、『末燈鈔』には『西方指南抄』との記述の違いが二点ある。一点は、『西方指南抄』にはない「二道」を、「二蔵」と「二行」の間に付け加えていることであり、もう一点は、『西方指南抄』には、「四乗の中には仏乗なり」として、浄土宗を仏乗と判釈しているカ所を、「四乗といふは、一には仏乗、二には菩薩乗、三には縁覚乗、四には声聞乗なり。いまこの浄土宗は菩薩乗なり。」として、菩薩乗と判釈している点である。前者については、おそらく「二行」を上げると先立って、その行を「易行」であると規定する意をもってのことであろう。よって、この点については、法然の意を変えて付加しているということではない。それに対するに、「四乗」についての判釈のカ所は、法然が浄土宗を「仏乗」と判釈しているのを、「菩薩乗」であると変えているのである。そこには、親鸞の、浄土宗は人をして菩薩たらしめる仏道であるとの明瞭な意図が込められているといわなければならないのである。

そのことが注意されるとき、菩薩という課題が親鸞の生涯をつらぬく課題であったことに気づかされる。いま、ざっと見ておきたい。

まず、十九歳に磯長の聖徳太子廟で得たと伝えられる太子からの夢告が、

我三尊化塵沙界 日域大乘相應地

諦聽諦聽我教令 汝命根應十余歲

命終速入清淨土 善信善信真菩薩

〔『真宗史料集成』七・三二九頁〕

とあり、そこに「善信善信真菩薩」で結ばれている。このカ所をどう読むかは問題となるところであるが、私は、比叡山が大乗菩薩道の根本道場であったことからして、またその後の親鸞の問題意識からして「善信善信、真の菩薩よ」と読みたい。そこに、親鸞が「菩薩」に対して深い関心を持っていたことが知られるところである。

そしていま一つは、親鸞が八十三歳の時に著したと考えられる『愚禿鈔』に、  
本願を信受するは、前念命終なり。

「即ち正定聚の数に入る。」文

「即の時必定に入る」文

「又必定の菩薩と名づくるなり」文

〔『定本親鸞聖人全集』二漢文篇一三三頁〕

「西岸有人喚言、汝一心正念直來、我能護」と言うは、「西岸の上に人有りて喚ぼうて言わく」というは、阿弥陀如来の誓願也。「汝」の言は行者なり、斯れ則ち必定の菩薩と名づく。

『定本親鸞聖人全集』二漢文篇四六頁

とあつて、本願を信ずる者は必定の菩薩たらしめられることがいわれている。

また、親鸞は特に晩年、ご消息に見られるように、念仏者は弥勒菩薩と同じであることを盛んに言っていく。一例を上げるなら、

まことの信心あるひとは等正覚の弥勒とひとしければ、如来とひとしとも諸仏のほめさせたまひたりとこそきこへてさふらへ。

『定本親鸞聖人全集』三書簡篇一五六頁

弥陀他力の回向の誓願にあひたてまつりて、真実の信心をたまはりてよろこぶころのさだまるとき、撰取してすてられまいらせざるゆへに、金剛心になるときを正定聚のくらいに住すともまふす。弥勒菩薩とおなじくらいになるとも、とかれて候めり。弥勒とひとつくらいになるゆへに、信心まことなるひとをば仏とひとしともまふす。また諸仏の眞実信心をえてよろこぶをば、まことによるこびて、われとひとしきものなりと、とかせたまひてさふらふなり。

『定本親鸞聖人全集』三書簡篇一〇四頁

等とある。

そのように親鸞は、その生涯において菩薩という課題を持ち、その菩薩という課題が念佛者のところに阿弥陀の本願によつて実現していることを尋ねあてていったものと了解されるのである。

## 二 菩薩にいつつ

ところで菩薩とは、自利利他成就の志願に生きる存在であり、それは大乘仏教が見出してきた人間像である。大乘仏教は、個人性に偏した仏教を小乗仏教と批判して、自利利他成就の志願に生きる仏道を大乘仏教として表明し、そこに人間のあるべき像を求めたのである。そしてそのことは、決して教理論上の問題ではない。関わりを生きる人間としての生のあり方・構造に根ざしたところからの、人間の本源的な要求として自利利他の志願を見出し、その成就のところこそ人間としての充全なる救いがあり、その志願に生きる人間像を菩薩として見出したということである。その意味において、大乘仏教の歴史は自利利他の成就を求めて悪戦苦闘してきた歴史であるといえる。そのことは、龍樹の『十住毘婆沙論』『易行品』に『助道法』からの引文として説かれている、次の文に実感的に表されている。

若し声聞地、及び辟支仏地に墮する、是れを菩薩の死と名づく。則ち一切の利を失す。若し地獄に墮するも、是の如き畏れを生ぜず。若し二乗地に墮すれば、則ち大怖畏と爲す。地獄の中に墮するも、畢竟じて仏に至ることを得。若し二乗地に墮すれば、畢竟じて仏道を遮す。仏自ら経の中に於いて、是の如き事を解説したもう。人の寿を食る者の、首を斬らんとすれば則ち大きに畏るるが如く、菩薩も亦是の如し。若し声聞地、及び辟支仏地に於いては、應に大怖畏を生ぜべし。

〔真宗聖教全書〕一・二五三頁

そのような菩薩道を、親鸞も二十年間比叡山において求めたのである。そして先の夢告には、求めつつも得ることの

できない親鸞の苦悩が、その裏に深くにしみ出ている。そして若干飛躍するが、後に親鸞は、そのような自らも求めた大乘菩薩道について、

一切菩薩のたまはく

われら因地にありしとき

無量劫をへめぐりて

万善諸行を修せしかど

恩愛はなはだちがたく

生死はなはだつきがたし

〔定本親鸞聖人全集〕二和讃篇七九頁

と、その不可能性を大乘の祖である龍樹和讃において記しているのである。そしてさらに親鸞は、『正像末和讃』において、

三恒河沙の諸仏の

出世のみもとにありしとき

大菩提心おこせども

さとりかなはで流転せり

〔定本親鸞聖人全集〕二和讃篇・一四七頁

と和讃し、その「さとりかなはで流転せり」に、

しりきのほたいしむにてけふまでかくてまとへりとしるへし

親鸞における二種回向と菩薩道の課題

と左訓を付しているのである。そこには、自利利他成就を求めての大乗菩薩道の不可能性が、徹底して凝視され押さえられているのである。

さてしかし、そうであるとして、自利利他を課題とする大乗菩薩道は人間の存在構造に根ざす要求である限り、困難であり不可能であるからといって放棄することができない体のものではないといわなければならない。そこに、一度大乗菩薩道に自らの道を求めた親鸞において、大乗菩薩道の課題を抱えて本願念佛の道にそのことの明確な成就を尋ねていったと言えるのではないか。そして、そのことが本願によって応えられる世界を往相回向・還相回向の二種回向の世界として見出したものと了解されるのである。そして、結論を先に述べれば、往相回向は衆生の自利の課題に応える如来の救済のはたらきの相であり、還相回向は衆生の利他の課題に応える衆生救済のはたらきの相であると了解されるのである。

### 三 親鸞と利他の課題

二種回向について述べるに先立って、親鸞において自利利他の課題に応える世界を二種回向に見出されたとして、なぜ見出されたのかについて若干尋ねておきたい。勿論、二種回向については曇鸞、さらにさかのぼれば天親にその端緒があることはいうまでもない。また道綽・善導・法然等においても、利他の課題に応える相としての還相回向について



述べられていないことはない。若干にしる述べられているのである。

たとえば善導において、『観経』三心釈の「回向発願心釈」の結びには、

又回向と言うは、彼の国に生じ已りて、還りて大悲を起こして、生死に回入して、衆生を教化する、亦回向と名づくる也。

〔定本親鸞聖人全集〕一・一一二頁

と、還相回向に相当する文が記されている。また、法然においても、

極楽へひとたびむまれ候ぬれば、ながくこの世に返る事候はず、みなほとけになる事にて候也。ただし人をみちびかんためには、ことさらに返る事も候。されども生死にめぐる人にては候はず。〔真宗聖教全書〕四・六五二頁

等とある。しかし親鸞に比するに、親鸞ほどに比重が重くはないといわなければならない。親鸞の場合、その教学の根幹をなすものとして位置づけられているのである。

では、なぜ親鸞において、教学の根幹をなすものとして位置づけられることになったのか。そこには、親鸞が、流罪以降出家の身としてではなく、家庭を持ち、まさに五濁の世をこそ自らの生きる場として生きたことによるといえるのではないか。そのことを教えられたのが、福田琢氏の指摘である。氏は、釈尊の原始経典群の中で、出家教団の人々に説かれた経典に比して、在家教団の人々に対して自利利他、就中利他が勧められていることを指摘されているのである。そこに思われることは、利他の課題が身に必然するかたちで迫ってくるのは、出家生活者ではなく在家生活者においてであるということである。在家生活者は、家庭を持ち、時代社会の中で人々との深い関わりにおいて生きるものだからである。

親鸞において、信が問われる生涯の中心課題が利他の問題であったことが知られる。その第一に上げられるのが、三部経千部読誦の問題である。親鸞四十二歳の時の出来事であり、そのことを夢に見てうなされているのが五十九歳の時である。そのことは、『恵信尼消息』に詳細に記されているところであるが、いずれも大飢饉の惨状を眼前にしたことであつたという。そこには、

げにげにしく三ぶきやうをせんぶよみて、すざうりやくのためにとてよみはじめてありしを、これはなにごとぞ、  
じしんけう人しんなんちうてんきやうなむとて、身づから信じ人をおしへて信ぜしむる事、まことの仏おんをむく  
いたてまつるものと信じながら、みやうがうのほかにはなにごとこのふそくにて、かならずきやうをよまんとするや  
と思かへしてよまざりしことの、さればなほもすこしのころとこのありけるや、

〔定本親鸞聖人全集〕三書簡篇一九五頁

とある。まさに「衆生利益」を課題としての所業であつた。

さらに、親鸞に利他の課題が重くのしかかつてきたのが、親鸞晩年建長年間の実子善鸞の義絶をもって終わる関東教団の問題であつたといえるであろう。親鸞は、それと時期を合わせるようにして多くの書を著している。また、問題収束後に、『四十八誓願文』を記し、そして『論註』に加点を施し、さらに法然の言行録である『西方指南抄』の書写等を行つている。そこには、関東教団の問題を通して真宗を今一度確かめ直してより徹底し、明確にしていこうとする意図が伺われる。そして、そこで著されているものの中心内容が二種回向に関するものであることが注意させられるのである。すなわち、『如来二種回向文』や『入出二門偈』であり、さらに『浄土三経往生文類』である。

そのあたりに関することとして曾我量深師は、それらの著作と同期、すなわち八十五歳の頃に著されたと考えられる『正像末和讃』の二種回向の記述が、それ以前の著述に比して、より明確になっていることを指摘している。次のごとくである。

今まで自分は使命感というものがはつきりしていなかったと、夢のお告げによって使命感がはつきりしてきた。その使命感を明らかにしていったものが『正像末和讃』でしょう。往相、還相なんてことも『正像末和讃』へきますというところ、みんな現在になっていますよ。  
（『曾我量深対話集』二五〇頁・彌生書房刊）

『正像末和讃』をもって照らしてみるとというと、還相もまた“現在”にあり—如来の回向というものが本であります。如来の回向という方から見るとというと、“往相”も“還相”もみな南無阿弥陀仏という中にあるのであって、そこに矛盾も撞着もないものであると、『正像末和讃』へ来ますとそういうふうに教えてある。

（『親鸞との対話』一一二頁・彌生書房刊）

以上のごとくであるとすれば、親鸞は晩年、関東教団の出来事を通して、五濁の世を生きる身であることをより深く自覚したということがあったのではないか。そして、時代と共に救われていく道を、いよいよ逼迫するかたちで尋ねたのではないか。そして、その中心には、義絶した実子善鸞と共なる救いの問題があったのではないか。そのようなことが想像されるのである。そのような問題を背景として親鸞は、いよいよ二種回向、特に還相回向の世界を明瞭にしているものと考えられるのである。

#### 四 二種回向

ところで、二種回向とは何か。先にも述べたが、衆生の自利利他の要求に応える如来の衆生救済の二相であると了解される。そのことについては、真宗連合学会から二〇〇九年発刊予定の『真宗研究』第五十三輯に、先行論文として「親鸞の二種回向観——特に還相回向について——」とのテーマで論じたところである。詳細はそれをご覧いただくことにして、いまその概略を述べるなら、まず、二種回向が如来の衆生救済の二相であることは、二種回向が、『教行信証』「信卷・欲生心釈」に、

云何が回向したまえる。一切苦悩の衆生を捨てずして、心に常に作願すらく、回向を首として大悲心を成就することを得たまえるが故にとのたまえり。回向に二種の相有り。一つには往相、二つには還相なり。往相は、己が功德を以て一切衆生に回施したまいて、作願して共に彼の阿弥陀如来の安樂淨土に往生せしめたまうなり。還相は、彼の土に生じ已りて、奢摩他・毘婆舍那・方便力成就することを得て、生死の稠林に回入して、一切衆生を教化して、共に仏道に向かえしめたまうなり。若しは往・若しは還、皆衆生を抜きて生死海を渡せんが為に、とのたまえり。是の故に回向為首得成就大悲心故と言えり、と。

〔定本親鸞聖人全集〕一・二二八頁

と、往還二回向ともに敬語表現で記されているところに明らかである。そしてさらに、その二相が、衆生の自利利他の課題に応える相であることは、『如来二種回向文』に明瞭である。

『如来二種回向文』には、まず、

『無量寿経優婆提舍願生偈』に曰わく、「云何回向、不捨一切苦惱衆生、心常作願、回向為首、得成就大悲心故」文  
この本願力の回向をもて如来の回向に二種あり。一には往相の回向、二には還相の回向なり。

（『定本親鸞聖人全集』三和文篇二二七頁）

と、如来の回向に往還の二種があることを述べ、続いて、

往相の回向につきて、真実の行業あり、真実の信心あり、真実の証果あり。

と述べて、以下、

これらの選択本願は、法蔵菩薩の不思議の弘誓なり。しかれば真実信心の念仏者は、『大経』には「次如弥勒」と  
のたまへり。これらの大誓願を往相の回向とまふすとみえたり。弥勒菩薩とおなじといへりと『龍舒浄土文』には  
あrawせり。

まだが、往相回向について述べられている。そして、続いて、

二つに、還相回向といふは、

より以下、

これは如来の還相回向の御ちかひなり。

まだが、還相回向について述べられている。そして、それ以下が「専修寺本」と「上宮寺本」では多少表現を異にして  
いる。「専修寺本」では、

これは他力の還相の回向なれば、自利・利他ともに行者の願樂にあらず、法蔵菩薩の誓願なり。他力には義なきをもて義とすと大師聖人はおほせごとありき。よくよくこの選択悲願をこころえたまふべし。

〔『定本親鸞聖人全集』三和文篇二二〇頁〕

となつてゐるが、「上宮寺本」では、

これらを如来の二種の回向ともうすなり。他力の往相還相の回向なれば、自利・利他ともに行者の願樂にあらず。大願より自然にうるなり。しかれば、他力には義なきをもつて義とすと、大師聖人はおほせごとありき。よくよくこの選択悲願をこころえたまふべしと。

（東本願寺刊『真宗聖典』の注記による）

となつてゐる。

内容は、両本ともに変わらないものと了解されるが、「上宮寺本」の方が、より整理された表現であるといえるであろう。もつて、「他力の往相還相の回向なれば、自利・利他ともに行者の願樂にあらず。大願より自然にうるなり。」と、往相還相と自利利他が対記されていて、衆生の自利の課題に應えるのが如来の往相回向の相であり、衆生の利他の課題に應えるのが還相回向の相であることが明瞭に示されているのである。もつて、衆生の自利利他の課題が本願によつて應えられる二種相が、往還の相なのである。

それでは、衆生の自利利他の課題に應える如来の往還二種の相とはどのような相であるのか。往相回向については、親鸞自身「教巻」で、

往相の回向について、真実の教行信証有り。

〔『定本親鸞聖人全集』一・一九〕

と明瞭に示しているので、教行信証という相であることは明らかである。そこに、衆生の自利の課題に応える相、すなわち一人一人の衆生を救おうとする本願の表現相があるのである。

次に、還相とはいかなる相であるのか。まず、先にあげた「信巻・欲生心釈」の還相回向の文には、「生死の稠林に回入して、一切衆生を教化して、共に仏道に向かえしめたまうなり。」とあった。そうであるとすれば、それは、どこまでも衆生の現実の直中であつて、一切の衆生をして仏道に入れしめようとはたらき続けている因位法蔵菩薩としての相であるといえるのではないか。そして、そのことを明確に示しているのが、『入出二門偈』の、

彼の土に生じ已りて速疾に、奢摩他毘婆舍那巧方便力成就を得已りて、生死園煩惱林に入りて、応化身を示し神通に遊びて、教化地に至りて群生を利したまう。即ち是れを出第五門と名づく、園林遊戯地門に入るなり。本願力の回向を以ての故に利他の行成就したまえり、知るべし。無碍光仏、因地の時、斯の弘誓を發し、此の願を建てたまいき。菩薩已に智慧心を成じ、方便心・無障心を成じ、妙樂勝真心を成就して、速やかに無上道を成就することを得たまえり。

〔定本親鸞聖人全集〕二漢文篇一一八頁

との文である。この偈文は、曇鸞によつて還相回向を意味する文として取り上げられた『浄土論』の園林遊戯地門の文に基づいて、『論註』の文をも含めたかたちで偈にされたものである。すなわち、還相回向を内容とする偈頌の一段である。ここで注意されるのが、「無碍光仏、因地の時、斯の弘誓を發し、此の願を建てたまいき。菩薩已に智慧心を成じ、方便心・無障心を成じ、妙樂勝真心を成就して、速やかに無上道を成就することを得たまえり。」である。親鸞は、法蔵菩薩による本願の發起を還相のところに位置づけて記しているのである。そしてさらに、「斯の弘誓を發し、此の願を建てた

まいき」は、『大経』「勝行段」、すなわち法蔵菩薩の永劫修行を説く力所の、

時に彼の比丘、其の仏の所の諸天・魔・梵・龍神八部大衆の中にして、斯の弘誓を發し、此の願を建て已りて、一向に志を専らにして、妙土を莊嚴す。

〔真宗聖教全集〕一・二四頁

の文をもつてしているのである。そして、さらに続いて、「菩薩已に智慧心を成じ、方便心・無障心を成じ、妙樂勝真心を成就して」と記して、『教行信証』「証卷・還相回向」の力所に引いている菩薩の心根をもつて永劫修行の心根として記しているのである。以上を総合するとき、親鸞は、衆生を救済すべく發願して修行する因位法蔵菩薩の相に、如来の還相としての救いの相を戴いておられたことは明瞭である。

以上のごとく、往相としての救いの相が如来の教行信証としての相であり、還相としての救いの相が因位法蔵菩薩としての相であると了解されるとすれば、如来の衆生救済の相の次第としては、還相こそがより根源的な相であり往相に先行する相であるといわなければならないであろう。還相としての法蔵菩薩の相が、さらに衆生の現実へ表現された相が往相としての教行信証である。

## 六 衆生にとっての還相回向の意義

述べてきたように、法蔵菩薩として一切衆生をして仏道に向かわしめ続けているはたらきが還相としての衆生救済の



相であるとして、では、そのことをもって利他の課題が応えられる衆生の側からするなら、それはどういふことなのであるか。一言にしていえば、それは、自身を救う本願のはたらきに、そのさらにより深い意義として、一切衆生を仏道に向かわしめ救おうとするはたらきとしての意義を見出し、てくることであるといえるのではないか。そこに、本願によつて自らが抱えている利他の課題が応えられていくのである。しかし、そこには、一つの課題がある。それは、本願との関わりにおける課題である。

すなわち、人生が問題となつた身が、教えとの縁により自力の否定において本願に遇う。これが本願との値遇の最初の一点であり、それは自らの救いの法としての本願との値遇、すなわち自利の課題に込えられることとしての本願との値遇であるといえるであろう。しかし、その身が、利他の問題に当面したときに本願への確信を失うということがあるのである。それが、親鸞の生涯で言えば、先に述べた三部経千部読誦等の問題である。かくて、そこには、より深い自力の否定が求められるのではないか。いわば、利他に對する自力心の否定である。そこにおいて、初めて受け止められる本願のはたらきが還相としての一切衆生を仏道に入れしめる因位法蔵菩薩のはたらきであるといえるのではないであらうか。

そしてさらに、親鸞は、そのような還相回向について、法蔵菩薩のはたらきが念佛者の上に徳としてあらわされていくことを包んで示しているのである。それが述べられているのが、「証卷」の還相回向の一段である。そこに記されている内容は、まさに、衆生に証果として恵まれる還相のはたらきである。そのことを親鸞は、「還相の利益」等と「利益」の語を付して表現するのである。そして、そのことは、先にあげた「信巻・欲生心釈」の還相回向文の読みと、「証

卷・還相回向」の還相回向文の読みの異なりとなつて示されている。

すなわち、「信巻」で、

還相は、彼の土に生じ已りて、奢摩他・毘婆舍那・方便力成就することを得て、生死の稠林に回入して、一切衆生を教化して、共に仏道に向かえしめたまうなり。

と、如来のこととして敬語表現をもつて還相回向が記されているのに対して、「証巻・還相回向」の力所では、

還相とは、彼の土に生じ已りて、奢摩他・毘婆舍那・方便力成就することを得て、生死の稠林に回入して、一切衆生を教化して、共に仏道に向かえしむるなり。

と記されていて、敬語表現がとられていないのである。このことは、「証巻・還相回向」の一段では、法蔵の徳が衆生にあらわされることとして還相が述べられていることを意味していると了解されるのである。もつて、その中に『論註』からの引文として記されている、親鸞によつて「還相回向の願」としての意義が見出された第二十二願文、すなわち、

設け我仏を得たらんに、他方仏土の諸々の菩薩衆、我が国に來生して、究竟して必ず一生補処に至らん。その本願の自在の所化、衆生の為の故に、弘誓の鎧を被て、徳本を積累し、一切を度脱せしめ、諸仏の国に遊びて、菩薩の行を修し、十方諸仏如来を供養し、恒沙無量の衆生を開化して、無上正眞の道を立せしめんをば除く。常倫に超出し、諸地の行現前し、普賢の徳を修習せん。若し爾らずは正覚を取らじ。〔『定本親鸞聖人全集』一・二〇四頁〕

は、法蔵菩薩の徳が念佛者にあらわれて、利他教化していく相・内容が願事として説かれているものと了解されるのである。

以上、論述してきたごとく、親鸞においてその人生の当初より抱えていた自利利他成就という菩薩道の課題が、往相・還相の二種回向をもって本願によって応えられていくことが尋ねあてられたといえるのである。そのことが、親鸞の生涯の歩みを通して、晩年に至りいよいよ明らかになっていった。そこに、『末燈鈔』第八通において、法然の言行録である『西方指南抄』に、浄土宗を四乗の中の仏乗であると記されている力所を、あえて菩薩乗と記したものと了解されるのである。

## 註

福田琢氏「ブツダに称賛される在家声聞」『パーリ学仏教文化学』第二十号所載）参照

## 注記

原漢文の文は、書き下し文にあらためた。